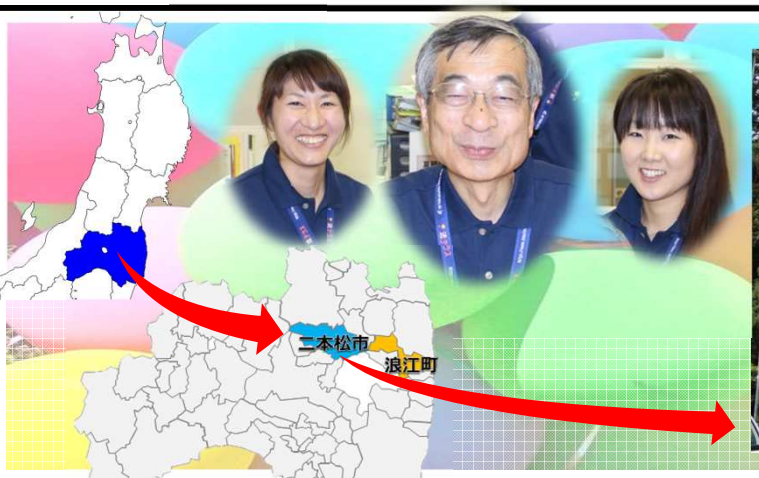
被災地出張所リポート～RAINBOW～

本部広報室

2015年1月20日発行

法テラス二本松



桜色 ほんとの空に 映えるまち

これは、福島県二本松市の観光キャッチコピーです。市の木をサクラに定める二本松市は、このコピーがあらわすように春になると沢山のサクラが咲き誇ります。中でも霞ヶ城公園は日本の桜百選に選ばれており、春のサクラだけでなく、秋には菊人形祭りが開催されるなど豊かな自然に恵まれています。また「ほんとの空」というフレーズは高村光太郎の詩集「智恵子抄」の中の「あどけない話」に登場します。東京で暮らす妻・智恵子が阿多多羅山（あたたらやま）から見える青空こそが本当の空だと話したことをうたっています。そんな二本松市は、江戸時代に丹羽氏十万石の城下町として栄えた歴史ある町でもあります。華やかな城下町文化を支えた職人たちの技と精神を受け継いだ二本松市は、その豊かな自然とも相まって日本酒や和菓子、民芸品などたくさんの名産品があります。

東日本大震災と二本松市

東日本大震災の際、震度6弱を記録した二本松市。今までに経験をしたことのない激しい揺れによる住宅の倒壊、公共施設の損壊などインフラに甚大な損害はあったものの、幸いにも震災によって亡くなった方はいませんでした。しかし、福島第一原子力発電所がある双葉郡と隣接しているため（地図参照）、原発事故の影響は大きく、市内では今も除染作業が続けられています。また二本松市は震災後、双葉郡浪江町から避難者約3,000人を受け入れており、震災から3年と7か月経った2014年11月末時点でも2,233名の方が避難生活を送っています。二本松市では、浪江町民と二本松市民が互いに支えあいながら復興に向けて歩んでいます。

法テラス二本松の存在

法テラス二本松の事務所は、JR東北線二本松駅から徒歩5分、旧安達地方広域行政組合自治センターの中にあります。二本松市には浪江町の仮役場が置かれていることもあり、震災から1年半後の2012年9月に福島県内初の被災地出張所として開所しました。この事務所の大黒柱は佐藤俊英（さとう・としひで＝写真中央）主幹です。佐藤主幹は長年、二本松市役所に勤めており、退職後に法テラス二本松の主幹となりました。元市役所職員であるというバックグラウンドを武器に「地域に根差した法テラス二本松」を目指し、地域との連携を強化してきました。

女性視点での広報

大黒柱である佐藤主幹を支えているのは、大内知恵（おおうち・ちえ＝写真右）さんと菅野美幸（すげの・みゆき＝写真左）さんです。大内さんは、イベントの企画やチラシのデザイン等を考えるのが得意な二本松の元気印！菅野さんは、細やかな配慮のできる穏やかで思いやりにあふれる方です。

2人は女性ならではの視点で、法テラスのPR方法を考えました。例えば、法テラスのロゴの塗り絵を幼稚園児にしてもらうことで親御さんに知ってもらう、スーパーに名刺サイズのカードを置かせていただくなど、市民の生活に近い場所での広報活動に力を入れて取り組んでいます。

復興なみえ町十日市祭

2014年11月29日（土）・30日（日）の2日間、市民交流センター周辺で「復興なみえ町十日市祭」が開催されました。このお祭りは、元々収穫を終えた人々が豊年を祝い、冬に向けて生活用品を整えるための市として明治時代から始まりました。現在では、東日本大震災による原発事故でバラバラに避難している浪江町民たちが集まるふれあいの場となっており、会場のあちこちで「久しぶりだね。〇〇さんは元気にしてる？」「今はどこに住んでるの？」「〇〇ちゃんはどうしてる？」といった声が聞こえてきます。避難先の山形を朝早く出発してこのお祭りに参加しているという方もいらっしゃいました。震災によって、故郷を離れた町民たちがこのお祭りを通じて久々の再会です。

二本松駅を出ると、たくさんの露店が並んでいました。タコ焼きや綿あめといった定番から、浪江焼きそばや大堀相馬焼などご当地もののお店まで色々！

ブースが目立つように飾り付けをする小坂事務局長（左）と大内さん（右）。紙風船がつぶれないように…真剣な表情です。

法テラス二本松は、二本松市民だけでなく浪江町民にも法テラスを知ってもらおう！もっと気軽に相談に来て欲しい！そんな願いを込めてこのお祭りに参加しています。初日は福島地方事務所から小坂渉（こさか・わたる）事務局長も駆けつけました。しかし、あいにくの雨模様。ブースの設営もひと苦労でした。「どうすれば足を止めてくれるかな？」「法テラスに興味を持ってもらうにはどうすればいい？」みんなで考えながら準備を進めました。飾り付けは元雑誌編集者の大内さんが中心となって行いました。アイデアいっぱい大内さんの手にかかれば真っ白なホワイトボードも素敵な法テラスの看板に早変わり♪

ブースの設置も完了し、いざ広報！と意気込んでいましたが…お祭り開始時刻である9時を過ぎても参加者が来ない！それもそのはず、この日の二本松市の最低気温は8.7度。冷たい雨が降っていたため参加者の出足が鈍っていたのです。「このまま人が来なかったらどうしよう？」と不安でいっぱいでしたが…午後には晴れ間も出てきて徐々に人出も増えてきました。さらに、法テラスのブースはちょうど浪江焼きそばのお店の前！浪江名物を食べようと行列ができました。ここぞとばかりに広報活動♪大内さんの飾り付けたホワイトボードをたくさんの方が興味深そうに眺めてくれました。準備していたメモ帳などのグッズ500個もあっという間になくなり、事務所まで追加のグッズを取りに行くことに。天気には恵まれなかったものの法テラス二本松を浪江町の方々にしっかりとPRすることが出来ました。

「なみっ娘すいとん」と「浪江焼きそば」（右写真）をいただきました。浪江町出身のお母さんたちが愛情込めて作ったなみっ娘すいとんは、雨で冷えた体に染み渡る優しい味でした。

2013年B-1グランプリ覇者の「浪江太麺大国」が法テラスのブースの目の前に！お店には大きな浪江町の地図が貼られていて、浪江町民は焼きそばのふたについているシールを自分が住んでいたところに貼っていました（左写真）。浪江町から多くの方が参加していることがわかります。

子どもたちが作る―

―30年後のまち

このお祭りでは、地元の子どもたちが大活躍です♪市民交流センター1階のロビーには、避難生活のため浪江町から二本松市内に仮校舎を移動させた浪江小学校や津島小学校の生徒たちの絵や習字などの作品が壁いっぱいに飾られていました（写真右）。そして、階段を登り、2階の展示室を覗くと、何やら可愛らしいオブジェ（写真上）がありました。これは、浪江町と二本松市の子どもたちが作った「30年後の未来のまち」です。実際に二本松市内のまち歩きをしながら、故郷のよさや問題点を考え、「30年後のまち」を形にしたもので、カラフルな家や遊園地のような建物など子どもらしさに溢れたまちが広がっていました。そんな中にも、畑や緑があり、浪江らしさが残っていました。

外のステージでは、浪江小学校の生徒たちが合唱をしていました（写真左）。浪江小学校の教育目標は「なみえを愛し みらいに向かって えがおで生きる子ども」です。この発表や展示物などお祭りの随所に「浪江を愛し、未来に向かって笑顔で生きている子どもたちの姿」を見ることができました。

福島県には、原発事故の影響で故郷に帰ることができない子どもたちがいます。子どもたちが笑顔で過ごせる未来を実現するために、まずは今の笑顔から…法テラス二本松の職員は子どもへの配布用に法テラスのグッズだけではなく吹き戻しを添えました。吹き戻しは子どもたちに大人気♪「吹き戻し以外はお母さんに渡してねー」と言いながら子どもたちへ配りました（写真右）。―グッズを受け取ってくれたお子様、法テラスのブースに足を止めてくれた皆さま　ありがとうございました。